

## 令和6（2024）年度 資源評価調査報告書（拡大種）

種名	ネズミゴチ	対象水域	太平洋中・南部
担当機関名	水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源研究センター、千葉県水産総合研究センター	協力機関名	

## 1. 調査の概要

千葉県の主要漁協のうち、漁獲統計情報にネズッポ類の記録がある漁協（外房～銚子地区2漁協、内房地区3漁協および東京湾内湾地区2漁協）においてネズッポ類の年別漁獲量（東京湾内湾地区1漁協のみ2010～2023年、その他の漁協は1998～2023年）を集計した。また、主要漁協への聞き取り等により水揚げ地区別の漁法、漁期および漁獲物に含まれる構成種等に関する情報を収集した。これらの情報をもとに、ネズッポ類漁獲量の大部分が本種の漁獲量と考えられる内房地区A漁協における直近26年間（1998～2023年）の漁獲量を本種の資源量指標値として資源の水準・動向の判断を行った。

## 2. 漁業の概要

千葉県において、ネズミゴチ *Repomucenus curvicornis* の漁獲量は「ネズッポ類」として他のネズッポ科の複数種とまとめて集計されている。本種を始めとするネズッポ類はメゴチという流通名で天ぷらの具材などとして珍重され、大型の個体は時に飲食店向けに高値で取引される。ネズッポ類は主に底びき網や刺し網で漁獲されるが、主体となる漁法や漁期、主な構成種は水揚げ地区によって大きく異なる。以下、千葉県沿岸3地区（外房～銚子地区、内房地区、東京湾内湾地区）におけるネズッポ類を対象とした漁業についてそれぞれ記載する。外房～銚子地区では、ネズッポ類の漁獲は小型底びき網（板びき網）によるものが大部分を占め、9～11月頃に水揚げが多い傾向にある。同地区は千葉県主要漁協のネズッポ類合計漁獲量の大半を占めるものの、漁場が外洋に面し、深い水深帯も広く含むことから、本種以外にトビヌメリ *R. beniteguri*、ヨメゴチ *Calliurichthys japonicus* など複数種がネズッポ類として漁獲されていると考えられる。内房地区では、刺し網による漁獲量が大部分を占め、近年は5月頃に漁獲のピークが見られる。刺し網の漁場は岸近くの浅場で、漁獲対象となるのは比較的大型の個体である。本種は本海域に分布する浅海性の種では特に大型になることから、刺し網で漁獲されているネズッポ類の主体を成しているものと推察されるが、トビヌメリが混ざる可能性もある。東京湾内湾地区では、小型底びき網による漁獲量が大部分を占め、漁獲されるネズッポ類は内湾性の特に強い小型種ハタタテヌメリ *R. valenciennei* を主体に本種が混ざると推測される。

1998～2023年の千葉県における主要漁協のネズッポ類漁獲量合計値（地区別、千葉県調べ）を図1に示す。合計漁獲量は、1998～1999年には140トンを超えていたが、その後

減少を続け、2008年には50トンを割り込み、2010年代以降は増減を繰り返しながらほぼ横ばいに推移している。合計漁獲量の推移には、特に外房～銚子地区での漁獲量の減少が大きく影響しているが、東京湾内湾・内房地区における漁獲量も2000年以降減少傾向にある（図1）。現在、本種に対する漁獲努力量に関する情報は得られていない。

### 3. 生物学的特性

- (1) 分布・回遊：本種は国内では陸奥湾、青森県から九州南岸の日本海・東シナ海沿岸と北海道噴火湾から九州南岸の太平洋沿岸、瀬戸内海、屋久島に分布し、内湾の岸近くの砂底浅所に生息する（中坊・土居内 2011）。東京湾では湾奥から湾央より外湾の砂浜海岸や岩礁近くの砂底で多く見られるとされ（河野 2011）、東京湾内湾地区よりも内房地区で比較的多いと推測される。相模湾においては水深 5～45 m に広範に生息するとされる（亀井 1980）。ネズッポ類として本種とともに漁獲される他の代表種について、トビヌメリはやや外海を好み、外洋性沿岸と開放性内湾の岸近くの砂底に生息する（中坊・土居内 2011）。東京湾奥ではあまり見られない（河野 2011）。ヨメゴチは水深 20～200 m と比較的深場の砂泥底に生息し（中坊・土居内 2011）、土佐湾では主に 45 m 以深の深場に分布する（Gonzales et al. 1996）。ハタタテヌメリは内湾の泥底に生息し（中坊・土居内 2011）、東京湾でも内湾域での漁獲が多く、貧酸素水塊の解消した秋～翌年春には湾奥にも広く分布する（河野 2011）。
- (2) 年齢・成長：標準体長 17 cm 程度になる（中坊・土居内 2011）。仔魚は全長 10～11 mm で底生生活に完全移行する（Eda et al. 1994）。本種について寿命や成長についての情報は得られていないが、標準体長 10 cm 程度であるハタタテヌメリ（中坊・土居内 2011）では寿命は雌雄ともに 2 年とされ、体長は 1 年で約 7～8 cm、2 年で約 9～11 cm になる（Ikejima and Shimizu 1996）。
- (3) 成熟・産卵：本種について成熟・産卵に関する詳細な情報は得られていない。他のネズッポ科の魚種では、ハタタテヌメリの産卵ピークは東京湾では春と秋の 2 回とされるが、春生まれのコホートは貧酸素水塊によってほとんどが死滅するとされる（Ikejima and Shimizu 1999）。トビヌメリでは卵は分離浮性卵であり、20～22.6℃の水温環境において約 27 時間で孵化する（高井・吉岡 1979）。
- (4) 被捕食関係：本種の捕食者の情報として、渥美外海においてスズキ（鶴寄ほか 2015）、伊勢湾と渥美外海においてハモ（愛知県ほか 2022）、伊勢・三河湾においてマアナゴ（曾根ほか 2022）の胃内容物からそれぞれネズッポ類の出現報告がある。瀬戸内海における本種の食性報告では、主にクーマ、貝虫（ウミホタル）などの小型甲殻類や巻貝を捕食する（角田ほか 1979）。

### 4. 資源状態

千葉県的主要漁協における漁獲情報のうち、刺し網によるネズッポ類漁獲量の大部分が本種の漁獲量と推測される内房地区A漁協における漁獲量（千葉県調べ）を本種の資源量指標値とした（図2、表1）。直近26年間（1998～2023年）の資源量指標値の最大値・最小値間を3等分し、下から低位・中位・高位の水準の境界と定義すると、2023年の1.0

トンには過去最も小さく、低位に区分された（図2）。また、直近5年間（2019～2023年）の資源量指標値の推移から資源の動向は減少と判断された。なお、直近5年間の動向は2019年の漁獲量が突出して大きかったことが影響しており、2020年以降は横ばいに推移している。千葉県主要漁協におけるネズッポ類合計漁獲量については、2010年代以降はほぼ横ばいに推移し、2020～2023年の期間ではやや増加しているが、より長期的には減少傾向にある（図1）。ただし、こうした漁獲量の減少には漁業者数の減少などの要因も影響していると推測され、漁獲努力量の経年変化に関する情報収集が望まれる。

## 5. その他

利用可能な漁獲努力量情報について探索を継続する必要がある。また、ネズッポ類漁獲物の構成種に関する詳細な情報が望まれる。

## 6. 引用文献

- 愛知県・和歌山県・徳島県・高知県・大分県 (2022) 令和3(2021) 年度資源評価調査報告書  
ハモ. [https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2021/trends\\_2021\\_17.pdf](https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2021/trends_2021_17.pdf) (last  
accessed 2 December 2024)
- Eda, H., T. Takita and Y. Uno (1994) Larval and juvenile development of two dragonets,  
*Repomucenus richardsonii* and *R. valenciennei*, reared in a laboratory. *Japan. J. Ichthyol.*, **41**,  
149-158.
- Gonzales, B. J., N. Taniguchi, O. Okamura and Y. Machida (1996) Diet and feeding behavior of  
two dragonets *Calliurichthys japonicus* and *Repomucenus huguenini* in Tosa Bay, southern  
Japan. *Fisheries science*, **62**, 902-908.
- Ikejima, K. and M. Shimizu (1996) Growth and life span of the Hatatatenumeri-dragonet  
*Repomucenus valenciennei* in Tokyo Bay, Japan. *Fish. Sci.*, **62**, 850-854.
- Ikejima, K. and M. Shimizu (1999) Disappearance of a spring cohort in a population of the  
dragonet, *Repomucenus valenciennei*, with spring and autumn spawning peaks in Tokyo Bay,  
Japan. *Ichthyol. Res.*, **46**, 331-339.
- 角田俊平・具島健二・中井和夫・尾串好隆・村上 豊 (1979) ネズッポ属 (*Callionymus*) 魚類  
の食性について: I. ネズミゴチ *Callionymus punctatus* LANGSDORFF の食性. 広島大学  
生物生産学部紀要, **18**, 75-83.
- 亀井正法 (1980) 相模湾北岸の砂底沖浜水域に生息するネズッポ類 (*Callionymidae*) の分  
布. 神水試研報, **2**, 55-60.
- 河野 博 (2011) ネズッポ科. 「東京湾の魚類」加納光樹・横尾俊博編, 平凡社, 東京.  
246-247.
- 中坊徹次・土居内龍 (2011) ネズッポ科. 「日本産魚類検索第3版」中坊徹次編, 東海大学  
出版会, 平塚. 1331-1346.
- 曾根亮太・日比野学・下村友季・鶴寄直文・横内一樹 (2022) 伊勢・三河湾におけるマアナ  
ゴの資源動態と肥満度, 胃内容物組成及び餌料環境の変化. 愛知水試研報, **27**, 10-  
21.
- 高井 徹・吉岡俊夫 (1979) トビヌメリ *Callionymus beniteguri* の生活史—1. 卵・仔稚魚お

よび幼魚. 水大校研報, **27**, 147.

鵜寄直文・日比野学・澤田知希 (2015) イカナゴ伊勢・三河湾系群の夏眠期における被食状況. 黒潮の資源海洋研究, **16**, 93-102.

---

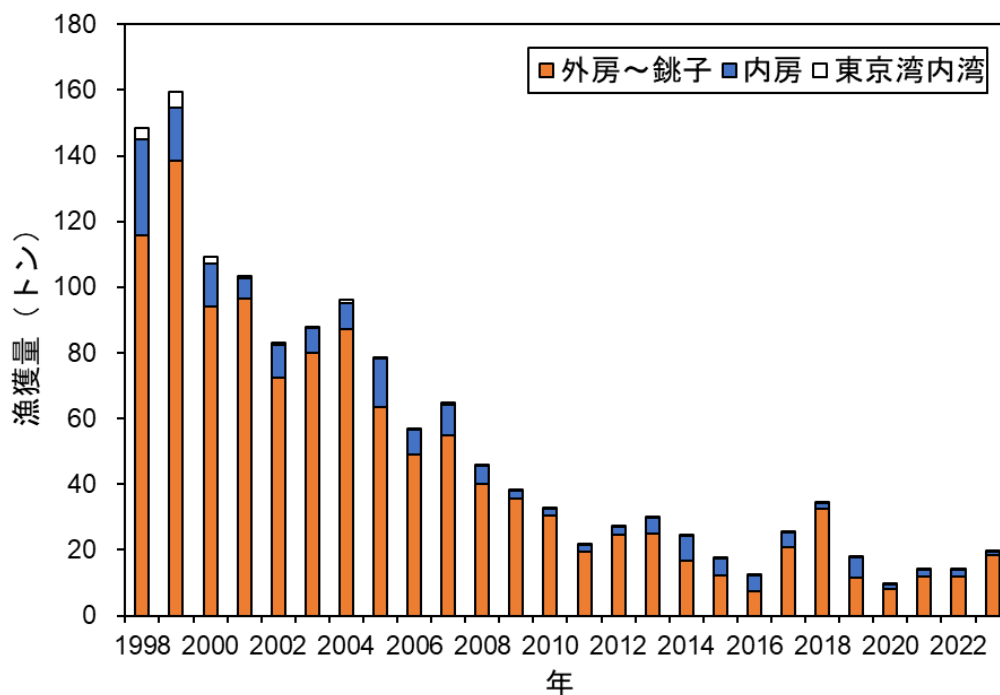


図1. 千葉県における主要漁協のネズッポ類漁獲量（地区別）  
 外房～銚子地区は2漁協分、内房地区は3漁協分の合計値。東京湾内湾地区については2009年までは1漁協分、2010年以降は2漁協分の合計値。

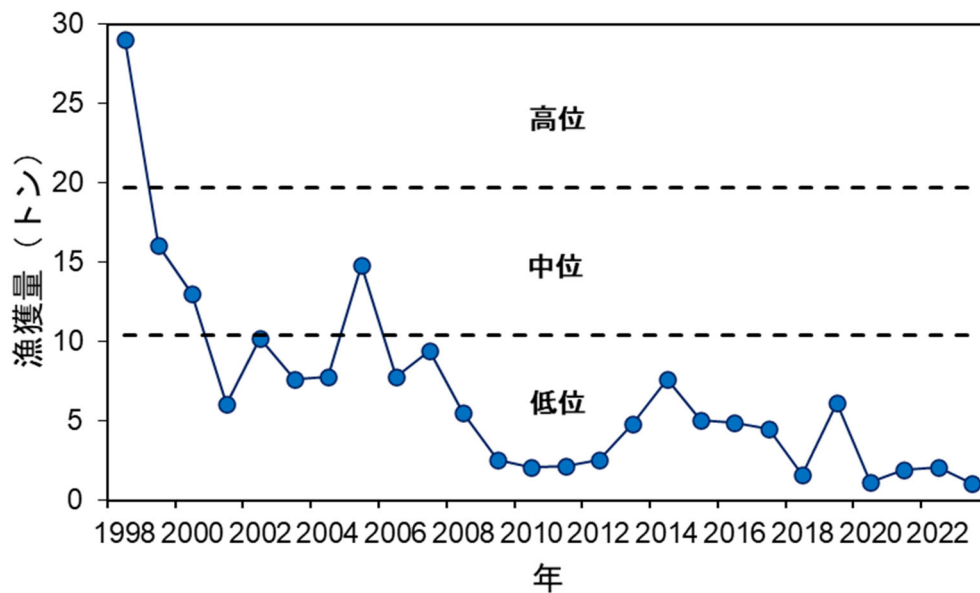


図2. 内房地区A漁協のネズッポ類漁獲量（トン）の推移（1998～2023年）  
 水準・動向を判断する資源量指標値とした。直近26年間（1998～2023年）における  
 最大値: 29.0 と最小値: 1.0 の間を3等分し高位・中位・低位を区分。

表 1. 内房地区 A 漁協のネズッポ類漁獲量（トン）集計値（1998～2023 年）

年	漁獲量 (トン)	年	漁獲量 (トン)
1998	29.0	2011	2.1
1999	16.1	2012	2.5
2000	13.0	2013	4.8
2001	6.0	2014	7.6
2002	10.2	2015	5.1
2003	7.6	2016	4.9
2004	7.8	2017	4.5
2005	14.8	2018	1.6
2006	7.8	2019	6.2
2007	9.4	2020	1.2
2008	5.5	2021	1.9
2009	2.5	2022	2.1
2010	2.0	2023	1.0